

『イエス様がなされた宣言・1』

'20/07/12

聖書箇所:マルコの福音書 1 章 14-15 節(新約 p.64)

つい最近、皆さんは、日本政府が出した「緊急事態宣言」というものを経験されました。…ので、権威ある者の発する宣言が、回りにどれほど大きな影響を与えるか…、あるいは、周りの者たちが、どれほど耳を傾けるべきかなのか、皆さんは、よく理解しておられると思います。確かに、ここ日本に住んでいる私たち日本人にとって、日本政府が発する宣言やニュースは、重要なものです。しかし、天の神様が、この地上に遣わされた救い主であるイエス・キリストが発せられた宣言や発言は、ある意味、政府や職場のトップが発する宣言よりも重要で…、私たちが耳を傾けるべきではないでしょうか？

命題: イエス様がなされた宣言とは、どういったものだったでしょう？

そこで、今日からしばらく、私たちは、イエス様がなされた宣言と言うか…、イエス様が發せられた、大きく分けて“3つの発言”というべきものに注目して、聖書の学びを進めていきたいと思ひます。願わくは、それによって、再度、私たちが、このイエス・キリストというお方がどういふお方であるのか？という理解を深めることができ…、また、私たちが今、何を考え、何をすべきなのか？というたことのヒントが、皆さんに与えられることを願うものであります。

どうぞ、今回のみことばである、マルコ 1:14 以降をお開きください。少し長いのですが、まずは、私の方で読ませていただきます。そこには、このように記されてあります。

- 14 ヨハネが捕らえられて後、イエスはガリラヤに行き、神の福音を宣べて言われた。
- 15 「時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい。」
- 16 ガリラヤ湖のほとりを通られると、シモンとシモンの兄弟アンデレが湖で網を打っているのをご覧になった。彼らは漁師であった。
- 17 イエスは彼らに言われた。「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしてあげよう。」
- 18 すると、すぐに、彼らは網を捨て置いて従った。
- 19 また少し行かれると、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネをご覧になった。彼らも舟の中で網を繕っていた。
- 20 すぐに、イエスがお呼びになった。すると彼らは父ゼベダイを雇い人たちといっしょに舟に残して、イエスについて行った。
- 21 それから、一行はカペナウムに入った。そしてすぐに、イエスは安息日に会堂に入って教えられた。
- 22 人々は、その教えに驚いた。それはイエスが、律法学者たちのようではなく、権威ある者のように教えられたからである。
- 23 すると、すぐにまた、その会堂に汚れた霊につかれた人がいて、叫んで言った。
- 24 「ナザレの人イエス。いったい私たちに何をしようというのです。あなたは私たちを滅ぼしに来たのでしょうか。私はあなたがどなたか知っています。神の聖者です。」
- 25 イエスは彼をしかって、「黙れ。この人から出て行け」と言われた。
- 26 すると、その汚れた霊はその人をひきつけさせ、大声をあげて、その人から出て行った。
- 27 人々はみな驚いて、互いに論じ合って言った。「これはどうだ。権威のある、新しい教えではないか。汚れた霊をさえ戒められる。すると従うのだ。」
- 28 こうして、イエスの評判は、すぐに、ガリラヤ全地の至る所に広まった。

I・悔い改めて、福音を信じなさい！(14-15 節)

申し訳ありません。今は、私が考える1つの文脈として、14-28節までを読ませていただきましたが、今日のところは、15節までしか学んでいくことができません…。どうぞ、まずは、今読んだ内の、14-15節の部分にご注目ください。そこには、“悔い改めて”、福音を信じなさい！というイエス様の宣言？発言があります。このことは、皆さんもよくご存じのように、イエス様は素より、この聖書のみことばが一貫して、教えてくれていることでもあります。そういったことを、今から、と一緒に確認していきたいと思ひます。

●『時が満ち、神の国は近くなった』とは？

どうぞ、まずは、14節から見ていきましょう。…この福音書を書いたマルコは、イエス様の活躍を、先駆者であったバプテスマのヨハネが、時の領主ヘロデ・アンテパスによって捕らえられた後についてのみ、書き記してくれています。一体どうして、バプテスマのヨハネが捕らえられ、殺されてしまったのか？その理由について、マルコは、この福音書の6章で詳しく教えてくれているので、そのことについては、6章を学ぶ時に、皆さんと一緒に学んでいきたいと思ひます。まあ、いずれにせよ、この時、バプテスマのヨハネが捕らえられて…、しばらく、幽閉されて後、ヘロデ・アンテパスの手によって殺されてしまうわけです。

そのヨハネが幽閉されている間、イエス様は、ガリラヤへ行って、神の福音を宣べて、こんな宣告をされました。それが、15節の内容です。『時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい！』って…(×2)。皆さん、覚えてくださっています？…実は、このような宣言は、イエス様よりも前に、あのバプテスマのヨハネの方が先に発していたメッセージだったのです。

だから、マタイ3章には、こういった記事が記されてあります。『1 そのころ、バプテスマのヨハネが現れ、ユダヤの荒野で教えを宣べて、言った。2 「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。』』って…。皆さん、分かってくださいます？…イエス様が發せられた宣言と言うか、伝道のメッセージは、元々、バプテスマのヨハネの方が先に発していたものだったのです。

まあ、こういった理由もあって、先週私が紹介したように、一般の歴史家たちは、イエス様がかつては、そのヨハネの弟子であった、なんていう風に考えるわけですから…、でも、皆さん、考えてみてください。イエス様も…、バプテスマのヨハネも、彼らは罪の赦しについて…、救いのメッセージを語ってくれていたわけで、そのメッセージが違っている方が問題じゃありません？…もしも、私たちが救われるための道が複数あるなら、その救いのメッセージが違っても問題ありません。しかし、聖書は、私たちが救われるための道が、何種類か…、複数あると教えてくれています？…それとも、救いの道は唯一、たった1つだけだと教えてくれているのでしょうか？どっちでしょう？

イエス様は、ヨハネ14章で、こうおっしゃっています。『わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。』(ヨハネ14:6)って…。この宣言からも分かります通り、私たちが救われるための道は、たった1つです！唯一です！…だから、私たちは、この救いの道を、宣べ伝えるわけです！もしも、救いの道がたくさんあるなら、何も、私たちは必死になって、イエス様を信じる信仰を伝えなくても良いかも知れません。そうでしょ！しかし、実際には、そうではありません。私たちは、イエス様を信じる信仰以外に、救われる道は無いのです！…だから、イエス様の発した宣言と、ヨハネが発した宣言が一致しているのは、何の問題もありません。いえ、むしろ、その方が“自然”なのです。そうですね！

さて…、少し話が前後しますけれども、このヨハネからバプテスマを受けられた後、イエス様は、しばらく、ユダヤ地方で宣教活動をされた後で、ガリラヤという、北方向へ移動されます。このガリラヤと言いますのは、イエス様が幼少期から、宣教活動をされるまで住んでおられた「ナザレ」という町がある場所で、イエス様からすれば慣れ親しんだ場所でもあります。

そこで、イエス様は、こう宣言されました、『**時が満ち、神の国は近くなった。…**』って…。これは、一体どういうことなのでしょう？⇒簡単に言うなら、神は、様々なことを御計画しておられる！ということ。…時々、聖書的に“無い”神様を信じている方たちは、「神とは、何らかの法則であったり…、大いなるパワーのことを指すのであって、神には、意志も、感情も無い…」ということを信じていたりされますが、聖書のみことばは、そうは教えません。聖書が教える真の神様は、意志も感情も御持ちで…、様々なことを考え、御計画しておられる御方なのです。

そうして、その神様の御計画に従って、御子イエス様が、この地上へ遣わされ…、その神様のみことばの内に、私たちが生まれ…、今も、その神様のみことばの内に生かされている、そう聖書のみことばは、教えてくれています。今日は、もう時間も無いので、簡単に聖書のみことばを紹介するなら、**イザヤ14:24**、『**万軍の【主】は誓って仰せられた。「必ず、わたしの考えたとおりに事は成り、わたしの計ったとおりに成就する。」**』というみことばです。このみことばが教えてくれているように、天の神様は、すべてのことを御支配なさっております。決して、無機質な存在や単なるエネルギーなどではありません。

その神様がなさることは、すべてにおいて完全・完璧です。だから、あのソロモンは、**伝道者の書で**、『**神のなさることは、すべて時にかなって美しい。…**』(伝道者3:11)と教えるわけです。また、新約聖書のローマ書では、『**神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださる…**』(ローマ8:28)ということが教えられてあるわけです。皆さんに質問ですが、ここで言われている『**すべてのこと**』というのは、私たちの日常で起こるような、ほんの些細な出来事を含むでしょうか？含まないでしょうか？…含みますでしょ？

天の神様は、すべてのことを…、ありとあらゆることを御自分の意のままにコントロールすることができるし…、この御方は、全知全能でもあるので、それを、ちゃんと長い目で見て…、果たして、それが神の目から見て益となるかどうか、そういったこともすべて判断することができるのです。

さて…、かなり長くなってしまいましたが、実は、これまではすべて前置きで…、今からが、より重要な部分です。ここで、イエス様は、「神の国が近くなった…」ということをおっしゃっておられます。ここで「神の国」という表現が使われてありますが、この表現には、ギリシャ語の「バシレイア(βασιλεία)」という言葉が使われています。このギリシャ語の言葉は、普通、「王権や王の支配、王国など…」を指す言葉なのですが、私は、多くの場合、この言葉を「救い」と同じような意味で理解しております。

どうぞ、皆さん。できましたら、ヨハネ3章を開けてみてください…ここで、イエス様は、ユダヤ人の指導者であったニコデモがやって来た時に、彼の思い(≒疑問?)を見抜いて、『**神の国**』に関する話をしてられます。3節がそうです。そこには、こう記されています、『**イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、「神の国を見る」ことはできません。」**』って…。ここでイエス様は、「神の国を見る」という表現を使っておられますが、でも、イエス様が言わんとしている内容は、明らかに、救いに関することです。そうですよね？だから、この話の最後…、結論部分で、イエス様は、こう話されたわけです。15節、『**それは、信じる者がみな、人の子にあって「永遠のいのち」を持つためです。」**』⇒このように、神の国と永遠のいのちとは、文脈によっては「同義語である」と言い得るのです。

また、ここだけではありません。どうぞ、今度は、**マルコ10:17-23**をご覧ください。ここは、皆さんもよくご存じの「イエス様のもとにやって来た金持ちの役人」のエピソードが載っています。ここマルコ伝には、はっきりと書かれてありませんが、別の福音書に書かれてある並行記事を見ると、この人物が、青年であり、また、役人でもあったことが分かります。『17 イエスが道に出て行かれると、ひとりの人が走り寄って、御前にひざまずいて、尋ねた。「尊い先生。永遠のいのちを自分のものとして受けるためには、私は何をし

たらよいでしょうか。』18 イエスは彼に言われた。「なぜ、わたしを『尊い』と言うのですか。尊い方は、神おひとりのほかに、だれもありません。19 戒めはあなたもよく知っているはずですよ。『殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽証を立ててはならない。欺き取ってはならない。父と母を敬え。』」20 すると、その人はイエスに言った。「先生。私はそのようなことをみな、小さい時から守っております。」21 イエスは彼を見つめ、その人をいつくしんで言われた。「あなたには、欠けたことが一つあります。帰って、あなたの持ち物をみな売り払い、貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。」22 すると彼は、このことばに顔を曇らせ、悲しみながら立ち去った。なぜなら、この人は多くの財産を持っていたからである。23 イエスは、見回して、弟子たちに言われた。「**裕福な者が神の国に入ることは、何とむずかしいことでしょう。」**』

⇒ここでも、先程と同じです。ここで、この金持ちの青年は、イエス様に対して、「永遠のいのちを得るための方法」、つまり、救いについて尋ねております。それに対して、イエス様は、その救いを、「神の国に入る…」という風に表現しておられます。だから、このすぐ後で、イエス様とその弟子たちとの間で、こんな会話がが続いています、『24 弟子たちは、イエスのことばに驚いた。しかし、イエスは重ねて、彼らに答えて言われた。「子たちよ。“神の国に入る”ことは、何とむずかしいことでしょう。25 金持ちが“神の国に入る”よりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。」26 弟子たちは、ますます驚いて互いに言った。「それでは、だれが“救われること”ができるのだろうか。」27 イエスは、彼らをじっと見て言われた。「それは人にはできないことですが、神は、そうではありません。どんなことでも、神にはできるのです。」』

⇒ね！皆さん、ここでも、「神の国に入る」ということが、「救われる」ということと同じ意味として扱われていますでしょ？…と同時に、このみことばは、人が人を救うことはできない！人を救えるのは、真の神様だけだ！と教えてくれています。…もちろん、これだけではありません。あの「山上の説教」(マタイ5-7章)の最後で、イエス様は、「天の御国に入る…」ということと、「救い」と同じ意味として話しておられます。ただ、マタイ7章では、「神の国」ではなくて、「天の御国」という表現がなされてありますが、でも、ここでも、今日のみことばと同じギリシャ語の「バシレイア」という単語が使われています。このように、「神の国が近くなった！」というイエス様の宣言は、もう間もなく、救いの道が備えられる！救いの道が完成する！というイエス様の宣言であると、私は理解しています。

●「悔い改め」と「信仰」とは？

じゃあ、今度、考えていきたいことは、今日のみことばで、イエス様がおっしゃられた“悔い改め”と信仰に関することです。このみことばを見てくださったら分かる通り(原語のギリシャ語でも)、ここで、イエス様は、①悔い改めなさい！という命令と、②福音を信じなさい！という、“2つの命令”を与えておられることが分かります。

いえ、ここだけではありません。聖書全体を見ますと、私たちが、自分の犯してきた罪が赦されるためには、ある時には、信仰を持つことだけが要求されていたり、別のある時には、悔い改めることだけが要求されていたり、また別のある時には、今日のみことばのように、信仰と悔い改めと、両方が教えられてある時があります。これを、私たちは、どう考えれば良いのでしょうか？

「私たちが救われるためには、イエス様を信じる信仰が必要である」そう教えてくれているみことばは、たくさんあります。でも、ひょっとしたら、今日このメッセージを聴いてくださっている皆さんの中には、「悔い改めの必要性」について、あまり具体的にお聞きになつたことがないのかも知れません。…どうぞ、今日のみことばの少し前、マルコ1:4をご覧ください。そのみことばは、私たちの罪が赦されるためには、何が必要だと教えてくれています？

⇒『**バプテスマのヨハネが荒野に現れて、「罪の赦しのための悔い改め」のバプテスマを宣べ伝えた。**』…いかがです？このみことばは、私たちの罪が赦されるためには、悔い改めが必要である！ということ

教えてくれていますよね？…「いえいえ、この時点で、イエスは、まだ十字架にもかかっておられないから…」という答えが返ってくるかも知れません。じゃあ、このみことばは、いかがでしょう？ルカ24章の最後…、もうイエスが十字架にかかって、復活してくださった後で、イエスが発言された内容です。『45 ここで、イエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて、46 こう言われた。「次のように書いてあります。キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、47 その名によって、“罪の赦しを得させる悔い改め”が、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。』(ルカ24:45-47)

「いやいや、これは福音書の中の教えでしょ？」という答えがあるかも…。じゃあ、これはどうでしょう？使徒3:19、『そういうわけですから、あなたがたの罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて、神に立ち返りなさい。』…私たちの罪がぬぐい去られるためには、何が必要だと、このみことばは教えてくれました？⇒『悔い改め』ですよ！

また、Ⅱコリント7:10、『神のみこころに添った悲しみは、悔いのない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします。』…ここはどうですか？このみことばは、私たちが救いに至るためには、何が必要だと教えてくれています？⇒これまた、『悔い改め』じゃないですか！

最後に、もう1か所だけ…。Ⅱペテロ3:9、『主は、ある人たちがおそいと思っただけで、その約束のこゝろを遅らせておられるのではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。』…いかがでしょう？このみことばもまた、私たちが滅びに至らないためには、何が必要だと教えてくれました？⇒『悔い改め』です！そうでしょ！

もちろん、今ご紹介したのがすべてではありません。でも、このように、決して少なくはないみことばが、「私たちが救われるためには、悔い改めが必要である！」ということを教えてくれています。…にも関わらず、今日、多くの教会が、私たちが救われるためには、イエスを信じる信仰だけが必要であって、悔い改めは必要ない！と教える傾向にあります。

しかし、私たちは、先程紹介したみことばはもちろん、それ以外にも幾つかの理由から、「本物の信仰には、必ず悔い改めが伴う！」という理解を持っています。逆に言えば、悔い改めを伴わない信仰は、本当の信仰とは言えません。だから、今、多くの教会では、「私はイエスを信じています！」と言いつつも、全くと、行ないが伴わない…。真の神様を愛そうとも、その神様に従おうともしない…。それどころか、教会にも来ようとしません。信仰の実が全く見られないクリスチャンであっても、その信仰を否定することができず…。彼らが天国に行けるという、実に、“いい加減な保証”を与えたまま、誰も責任を取ってくれないということが起こっているのです。

それこそ、まさしく、イエスがマタイ7章で警告された、『21 わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。』という、あの警告の通りのことが、今まさに、多くの教会で起こってしまっているのです！

<励ましの言葉>

もう、そろそろ、今日のメッセージを終えないといけないのですが、私は、神様から託された責任のゆえに、決して、そういったことを見過ごすわけにはいきません！…確かに、人を救ってくださるのは、神様です。私たち人間が、どれほど頑張ったところで、ただの1人も、救いに導くことはできません。しかし、私たちに与えられた責任は、その神様のみことばを、正しく、この世に伝えていくことです。果たして、私たちは、その人が本当に救われたかどうか、確固たる保証も無いのに、その人が信仰を告白したからと言って、「はい、大丈夫！あなたは救われましたよ！」と言って、安易に、その救いを保証すべきでしょうか？もしも、万が一、その人が救われてなくて、「自分は天に行ける…」と思っていたのが、天に行けなかったら、一体、誰が責任を取るのでしょうか？

Ⅰヨハネ3章によれば、私たちの救いの確信は、御霊なる神が与えてくださるものです。だったら、私たちは、その神様の領域を超えて、安易に、救いを保証するのではなくて…、その人に、聖書的な救いの方法を…、また、根拠を教えてあげるべきではないでしょうか？

どうか、皆さんには、しっかりと神様のみことばを突き詰めていってくださって…、間違いの無い、確固とした「救いの確信」をご自分のものとしてほしいと思います。そうして、まだ、イエスを信じておられない皆さんには、1日も早く、私たちの救い主であるイエスを信じ、この救いを、ご自分のものとしていただきたいと思ひます。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。